

CHAPTER 29

「だけど、どうしても『閉心術』の訓練を
やらないの？」ハーマイオニーが眉をひそめ
た。

「言ったじゃないか」ハリーがモゴモゴ言っ
た。

「スネイプが、もう基本はできてるから、僕
独りで続けられるって考えたんだよ」

「じゃあ、もう変な夢は見なくなったの
ね？」ハーマイオニーは疑わしげに聞いた。

「まあね」ハリーはハーマイオニーの顔を見
なかった。

「ねえ、夢を抑えられるってあなたが絶対に
確信持つまでは、スネイプはやめるべきじゃ
ないと思うわ」ハーマイオニーが憤慨し
た。

「ハリー、もう一度スネイプのところへ行っ
て、お願いするべきだとー」

「いやだ」ハリーは突っ張っ取った。

「もう言わないでくれ、ハーマイオニー、い
いね？」

その日は、イースター休暇の最初の日で、い
つもの習慣どおり、ハーマイオニーは一日の
大部分を費やして、三人のための学習予定表
を作った。

ハーマイオニーと言い争うよりそのほうが楽
だったし、ハリーとロンは勝手にやらせてお
いた。

いずれにせよ計画表は役に立つかもしれな
い。

ロンは、試験まであと六週間しかないと思っ
て仰天した。

「どうしていまごろそれがショックなの？」
ロンの予定表の一こまひとこまを杖で軽く叩
き、学科によって追う色で光るようにしなが
ら、ハーマイオニーが詰問した。

「どうしてって言われても」ロンが言った。

「いろんなことがあったから」

「はい、できたわ」ハーマイオニーがロンに
予定表を渡した。

「このとおりにやれば、大丈夫よ」

ロンは憂鬱そうに表を見たが、とたんに顔が
輝いた。

「毎週一回、夜を空けてくれたんだね？」

Chapter 29 Career Advice

“But why haven’t you got Occlumency
lessons anymore?” said Hermione, frowning.

“I’ve *told* you,” Harry muttered. “Snape
reckons I can carry on by myself now I’ve got
the basics. ...”

“So you’ve stopped having funny dreams?”
said Hermione skeptically.

“Pretty much,” said Harry, not looking at
her.

“Well, I don’t think Snape should stop until
you’re absolutely sure you can control them!”
said Hermione indignantly. “Harry, I think you
should go back to him and ask —”

“No,” said Harry forcefully. “Just drop it,
Hermione, okay?”

It was the first day of the Easter holidays
and Hermione, as was her custom, had spent a
large part of the day drawing up study
schedules for the three of them. Harry and Ron
had let her do it — it was easier than arguing
with her and, in any case, they might come in
useful.

Ron had been startled to discover that there
were only six weeks left until their exams.

“How can that come as a shock?” Hermione
demanded, as she tapped each little square on
Ron’s schedule with her wand so that it flashed
a different color according to its subject.

“I dunno ...” said Ron, “there’s been a lot
going on. ...”

“Well, there you are,” she said, handing him
his schedule, “if you follow that you should do
fine.”

Ron looked down it gloomily, but then

「それは、クィディッチの練習用よ」ハーマイオニーが言った。

ロンの顔から笑いが消えた。

「意味ないよ」ロンが言った。

「僕らが今年クィディッチ優勝杯を取るチャンスは、パパが魔法大臣になるのと同じぐらいさ」ハーマイオニーは何も言わなかった。ハリーを見つめていたのだ。

クルックシャンクスがハリーの手に前脚を載せて耳を掻いてくれとせがんでいるのに、ハリーはぼんやりと談話室の向かい側の壁を見つめていた。

「ハリー、どうかしたの？」

「えっ？」ハリーは、はっとして答えた。

「なんでもない」

ハリーは「防衛術の理論」の教科書を引き寄せ、索引で何か探すふりをした。

クルックシャンクスはハリーに見切りをつけて、ハーマイオニーの椅子の下にしなやかに潜り込んだ。

「さっきチョウを見たわ」ハーマイオニーはためらいがちに言った。

「あの人もとっても惨めな顔だった……あなたたち、また喧嘩したの？」

「えっ——あ、うん、したよ」ハリーはありがたくその口実に来った。

「何が原因？」

「あの裏切り者の友達のこと、マリエッタさ」ハリーが言った。

「うん、そりゃ、無理もないぜ！」ロンは学習予定表を下に置き、怒ったように言った。

「あの子のせいで……」

ロンがマリエッタ エッジコムのこと延々と毒づきはじめてのは、ハリーには好都合だった。

ただ、ロンが息をつく合間に、怒ったような顔をして頷いたり、「うん」とか「そのとおりだ」とか相槌を打てばよかったからだ。頭の中では、ますます惨めな気持ちになりながら、「憂いの篩」で見たことを反芻していた。

ハリーは、その記憶が、自分を内側から蝕んでいくような気がした。

両親がすばらしい人だったと信じて疑わなかったからこそ、スネイプが父親の性格につい

brightened.

“You’ve given me an evening off every week!”

“That’s for Quidditch practice,” said Hermione.

The smile faded from Ron’s face.

“What’s the point?” he said. “We’ve got about as much chance of winning the Quidditch Cup this year as Dad’s got of becoming Minister of Magic. ...”

Hermione said nothing. She was looking at Harry, who was staring blankly at the opposite wall of the common room while Crookshanks pawed at his hand, trying to get his ears scratched.

“What’s wrong, Harry?”

“What?” he said quickly. “Nothing ...”

He seized his copy of *Defensive Magical Theory* and pretended to be looking something up in the index. Crookshanks gave him up as a bad job and slunk away under Hermione’s chair.

“I saw Cho earlier,” said Hermione tentatively, “and she looked really miserable too. ... Have you two had a row again?”

“Wha — oh yeah, we have,” said Harry, seizing gratefully on the excuse.

“What about?”

“That sneak friend of hers, Marietta,” said Harry.

“Yeah, well, I don’t blame you!” said Ron angrily, setting down his study schedule. “If it hadn’t been for her ...”

Ron went into a rant about Marietta Edgecombe, which Harry found helpful. All he had to do was look angry, nod, and say “yeah” and “that’s right” whenever Ron drew breath, leaving his mind free to dwell, ever more

てどんなに悪口を言おうと、苦もなく嘘だと
言いきることができた。

ハグリッドもシリウスも、父親がどんなにす
ばらしい人だったかと、ハリーに言ったでは
ないか（ああ、そうさ。でも見ろよ、シリウ
ス自身がどんな人間だったか。ハリーの頭の中
で、しつこい声が言った……同じワルだっ
たじゃないか？）そうだ、マクゴナガル先生
が、父さんとシリウスには手を焼かされたと
言っていたのを、一度盗み聞きしたことがあ
る。しかし、先生は、二人が双子のウィーズ
リーの先輩格だという言い方をした。

フレッドやジョージが、おもしろ半分に誰か
を逆さ吊りにすることなど、ハリーには考え
られなかった……心から嫌っているやつでな
ければ……たとえばマルフォイとか、そうさ
れて当然のやつでなければ……。

ハリーはなんとかして、スネイプがジェーム
ズの手で苦しめられるのが当然だという理屈
をつけようとした。

しかし、リリーが「彼があなたに何をしたと
言うの？」と言ったではないか。

それに対してジェームズは、「むしろ、こい
つが存在するって事実そのものがね。わかる
かな……」と答えた。

そもそもジェームズは、シリウスが退屈だと
言ったからという単純な理由で、あんなこと
を始めたのではなかったか？ルービンをグリ
モールド プレイスで言ったことをハリーは
思い出した。

ダンブルドアが、ルービンを監督生にしたの
は、ルービンならジェームズとシリウスをな
んとか抑えられると期待したからだと……し
かし、「憂いの篩」では、ルービンは座った
まま、成り行きを見守っていただけだ……。

ハリーは、リリーが割って入ったことを何度
も思い出していた。

母さんはきちんとした人だった。

しかし、リリーがジェームズを怒鳴りつけた
ときの表情を思い出すと、他の何よりも心が
掻き乱された。

リリーははっきりとジェームズを嫌ってい
た。

どうして結局結婚することになったのか、ハ
リーはとにかく理解できなかった。

miserably, on what he had seen in the
Pensieve.

He felt as though the memory of it was
eating him from inside. He had been so sure
that his parents had been wonderful people that
he never had the slightest difficulty in
disbelieving Snape's aspersions on his father's
character. Hadn't people like Hagrid and Sirius
told Harry how wonderful his father had been?
(*Yeah, well, look what Sirius was like himself,*
said a nagging voice inside Harry's head. ...
He was as bad, wasn't he?) Yes, he had once
overheard Professor McGonagall saying that
his father and Sirius had been troublemakers at
school, but she had described them as
forerunners of the Weasley twins, and Harry
could not imagine Fred and George dangling
someone upside down for the fun of it ... not
unless they really loathed them ... Perhaps
Malfoy, or somebody who really deserved it ...

Harry tried to make a case for Snape having
deserved what he had suffered at James's
hands — but hadn't Lily asked, "What's he
done to you?" And hadn't James replied, "It's
more the fact that he *exists*, if you know what I
mean?" Hadn't James started it all simply
because Sirius said he was bored? Harry
remembered Lupin saying back in Grimmauld
Place that Dumbledore had made him prefect
in the hope that he would be able to exercise
some control over James and Sirius. ... But in
the Pensieve, he had sat there and let it all
happen. ...

Harry reminded himself that Lily had
intervened; his mother had been decent, yet the
memory of the look on her face as she had
shouted at James disturbed him quite as much
as anything else. She had clearly loathed James
and Harry simply could not understand how
they could have ended up married. Once or
twice he even wondered whether James had

一 二度、ハリーはジェームズが無理やり結婚に持ち込んだのではないかとさえ思った…。

ほぼ五年間、父親を想う気持ちが、ハリーにとっては慰めと励ましの源になっていた。誰かにジェームズに似ていると言われるたびに、ハリーは内心、誇りに輝いた。ところがいまは……父親を想うと寒々と惨めな気持ちになった。

イースター休暇中に、風は爽やかになり、だんだん明るく、温かくなってきた。しかし、ハリーは、他の五年生や七年生と同じに屋内に閉じ込められ、勉強ばかりで、図書室との間を重い足取りで往復していた。ハリーは、自分の不機嫌さは試験が近づいているせいにすぎないと見せかけていた。他のグリフィンドール生も勉強でくさくさしていたせいで、誰もハリーの言い訳を疑わなかった。

「ハリー、あなたに話しかけてるのよ。聞こえる？」

「はあ？」

ハリーは周りを見回した。

ハリーが独りで座っていた図書室のテーブルに、さんざん風に吹かれた格好のジニー ウィーズリーが来ていた。

日曜日の夜遅い時間だった。

ハーマイオニーは、古代ルーン文字の復習をするのにグリフィンドール塔に戻り、ロンはクィディッチの練習に行っていた。

「あ、やあ」ハリーは教科書を自分のほうへ引き寄せた。

「君、練習はどうしたんだい？」

「終わったわ」ジニーが答えた。

「ロンがジャック スローパーにつき添って、医務室に行かなきゃならな-て」

「どうして？」

「それが、よくわからないの。でも、たぶん、自分の梶棒で自分をノックアウトしたんだと思うわ」ジニーが大きなため息をついた。

「それは別として……たったいま、小包が届いたの。アンブリッジの新しい検閲を通ってきたばかりよ」ジニーは茶色の紙で包まれた箱を、テーブルに上げた。

forced her into it. ...

For nearly five years the thought of his father had been a source of comfort, of inspiration. Whenever someone had told him he was like James he had glowed with pride inside. And now ... now he felt cold and miserable at the thought of him.

The weather grew breezier, brighter, and warmer as the holidays passed, but Harry was stuck with the rest of the fifth and seventh years, who were all trapped inside, traipsing back and forth to the library. Harry pretended that his bad mood had no other cause but the approaching exams, and as his fellow Gryffindors were sick of studying themselves, his excuse went unchallenged.

“Harry, I’m talking to you, can you hear me?”

“Huh?”

He looked around. Ginny Weasley, looking very windswept, had joined him at the library table where he had been sitting alone. It was late on Sunday evening; Hermione had gone back to Gryffindor Tower to review Ancient Runes; Ron had Quidditch practice.

“Oh hi,” said Harry, pulling his books back toward him. “How come you’re not at practice?”

“It’s over,” said Ginny. “Ron had to take Jack Sloper up to the hospital wing.”

“Why?”

“Well, we’re not sure, but we *think* he knocked himself out with his own bat.” She sighed heavily. “Anyway ... a package just arrived, it’s only just got through Umbridge’s new screening process. ...”

She hoisted a box wrapped in brown paper onto the table; it had clearly been unwrapped and carelessly rewrapped, and there was a

たしかにいったん開けられ、それからいい加減に包み直されていた。

赤インクで横に走り書きがある。

「ホグワーツ高等尋問官検閲済み」

「ママからのイースターエッグよ」ジニーが言った。

「あなたの分も一つ……はい」

ジニーが渡してくれたこざいいなチョコレート製の卵には、小さなスニッチの砂糖飾りがいくつもついていた。

包み紙には、チョコの中にフィフティ フィズピーー袋入り、と表示してある。

ハリーはしばらく卵チョコを眺めていた。

すると、喉の奥から熱いものが込み上げてくるのを感じて狼狽した。

「大丈夫？ ハリー？」ジニーがそっと聞いた。

「ああ、大丈夫」ハリーはガサガサ声で言った。

喉に込み上げてきたものが痛かった。

イースターエッグがなぜこんな気持ちにさせるのか、ハリーにはわからなかった。

「このごろとっても減入ってるみたいね」ジニーが踏み込んで聞いた。

「ねえ、とにかくチョウと話せば、きっと…」

「僕が話したいのはチョウじゃない」ハリーがぶっきらぼうに言った。

「じゃ、誰なの？」ジニーが聞いた。

「僕……」

ハリーはさっとあたりを見回し、誰も聞いていないことを確かめた。

マダム ピンスは、数列離れた本棚のそばで、大わらわのハンナ アポットが積み上げた本の山に貸出し印を押していた。

「シリウスと話せたらいいんだけど」ハリーが呟いた。

「でも、できないことはわかってる」食べたいわけではなかったが、むしろ何かやるのがほしくて、ハリーはイースターエッグの包みを開き、一欠け大きく折って口に入れた。

「そうね」ジニーも卵形のチョコレートを少し頬ばりながら、ゆっくり言った。

「本気でシリウスと話したいなら、きっと何かやり方を考えられると思うわよ」

scribbled note across it in red ink, reading inspected and passed by the hogwarts high inquisitor.

“It’s Easter eggs from Mum,” said Ginny. “There’s one for you. ... There you go. ...”

She handed him a handsome chocolate egg decorated with small, iced Snitches and, according to the packaging, containing a bag of Fizzing Whizbees. Harry looked at it for a moment, then, to his horror, felt a hard lump rise in his throat.

“Are you okay, Harry?” asked Ginny quietly.

“Yeah, I’m fine,” said Harry gruffly. The lump in his throat was painful. He did not understand why an Easter egg should have made him feel like this.

“You seem really down lately,” Ginny persisted. “You know, I’m sure if you just *talked* to Cho ...”

“It’s not Cho I want to talk to,” said Harry brusquely.

“Who is it, then?” asked Ginny.

“I ...”

He glanced around to make quite sure that nobody was listening; Madam Pince was several shelves away, stamping out a pile of books for a frantic-looking Hannah Abbott.

“I wish I could talk to Sirius,” he muttered. “But I know I can’t.”

More to give himself something to do than because he really wanted any, Harry unwrapped his Easter egg, broke off a large bit, and put it into his mouth.

“Well,” said Ginny slowly, helping herself to a bit of egg too, “if you really want to talk to Sirius, I expect we could think of a way to do it. ...”

“Come on,” said Harry hopelessly. “With

「まさか」ハリーはお手上げだという言い方をした。

「アンブリッジが暖炉を見張ってるし、手紙を全部読んでるのに？」

「フレッドやジョージなんかと一緒に育ったりするとね」ジニーが考え深げに言った。

「度胸さえあれば何でもできるんじゃないかって考えるようになるのよ」

ハリーはジニーを見つめた。

チョコレートの効果かもしれないが、ルービンが、吸魂鬼との遭遇のあとはチョコレートを食べるように、いつも勧めてくれたたけーでなければ、この一週間、胸の中で悶々としていた願いをやっと口にしたせいかもしれないが、ハリーは少し希望が持てるような気になってきた。

「あなたたち、なんてことをしてるんです！」

「やばいっ」ジニーが呟きざまびょんと立ち上がった。「忘れてたー」

マダム　ピンスが萎びた顔を怒りに歪めて、二人に襲いかかってきた。

「図書室でチョコレートなんて！」マダム　ピンスが叫んだ。

「出てけー出てけー出てけっ！」

マダム　ピンスの杖が鳴り、ハリーの教科書、カバン、インク瓶が二人を追い立て、ハリーとジニーは頭をポンポン叩かれながら走った。

差し迫った試験の重要性を強調するかのよう
に、イースター休暇が終る少し前に、魔法界
の職業を紹介する小冊子やチラシ、ビラなど
が、グリフィンドール塔のテーブルに積み上
げられるようになり、掲示板にはまたまた新
しいお知らせが貼り出された。

進路指導

夏学期の最初の週に、五年生は全員、寮監と
短時間面接し、将来の職業について相談する
こと。

個人面接の時間は左記リストのとおり。

Umbridge policing the fires and reading all our
mail?”

“The thing about growing up with Fred and
George,” said Ginny thoughtfully, “is that you
sort of start thinking anything’s possible if
you’ve got enough nerve.”

Harry looked at her. Perhaps it was the
effect of the chocolate — Lupin had always
advised eating some after encounters with
dementors — or simply because he had finally
spoken aloud the wish that had been burning
inside him for a week, but he felt a bit more
hopeful. ...

“WHAT DO YOU THINK YOU ARE
DOING?”

“Oh damn,” whispered Ginny, jumping to
her feet. “I forgot —”

Madam Pince was swooping down upon
them, her shriveled face contorted with rage.

“*Chocolate in the library!*” she screamed.
“Out — out — OUT!”

And whipping out her wand, she caused
Harry’s books, bag, and ink bottle to chase him
and Ginny from the library, whacking them
repeatedly over the head as they ran.

As though to underline the importance of
their upcoming examinations, a batch of
pamphlets, leaflets, and notices concerning
various Wizarding careers appeared on the
tables in Gryffindor Tower shortly before the
end of the holidays, along with yet another
notice on the board, which read:

CAREER ADVICE

All fifth years will be required to attend a
short meeting with their Head of House during
the first week of the Summer term, in which
they will be given the opportunity to discuss

リストを辿ると、ハリーは月曜の二時半にマクゴナガル先生の部屋に行くことになっていた。

そうすると、「占い学」の授業はほとんど出られないことになる。

ハリーも他の五年生たちも、休暇最後の週末の大部分を、生徒たちが目を通すようにと寮に置かれていた職業紹介資料を読んで過ごした。

「まあね、癒術はやりたくないな」
休暇最後の夜、ロンが言った。

骨と杖が交差した紋章がついた表紙の、聖マンガのパンフレットに没頭しているところだった。

「こんなことが書いてあるよーNEW T試験で、『魔法薬学』、『薬草学』、『変身術』、『呪文学』、『闇の魔術に対する防衛術』で、少なくとも『E 期待以上』を取る必要があるってさ。これって……おっどろき……期待度が低くていらっしゃるよな？」

「でも、それって、とっても責任のある仕事じゃない？」ハーマイオニーが上の空で答えた。

ハーマイオニーが舐めるように読んでいるのは、鮮やかなピンクとオレンジの小冊子で、表題は、「あなたはマグル関係の仕事を考えていますね？」だった。

「マグルと連携していくには、あんまりいろんな資格は必要ないみたい。要求されているのは、マグル学のO.W.L.だけよ。『より大切なのは、あなたの熱意、忍耐、そして遊び心です！』だって」

「僕の叔父さんとかかわるには、遊び心だけでは足りないよ」ハリーが暗い声を出した。

「むしろ、いつ身をおかわすかの心だな」

ハリーは、魔法銀行の小冊子を半分ほど読んだところだった。

「これ聞いて。『やりがいのある職業を求めますか？ 旅行、冒険、危険が伴う宝探しと、相当額の宝のボーナスはいかが？ それなら、グリンゴッツ魔法銀行への就職を考えましょう。現在、『呪い破り』を募集中。海外でのぞくぞくするようなチャンスがあります…

their future careers. Times of individual appointments are listed below.

Harry looked down the list and found that he was expected in Professor McGonagall's office at half-past two on Monday, which would mean missing most of Divination. He and the other fifth years spent a considerable part of the final weekend of the Easter break reading all the career information that had been left there for their perusal.

“Well, I don't fancy Healing,” said Ron on the last evening of the holidays. He was immersed in a leaflet that carried the crossed bone-and-wand emblem of St. Mungo's on its front. “It says here you need at least an E at N.E.W.T. level in Potions, Herbology, Transfiguration, Charms, and Defense Against the Dark Arts. I mean ... blimey. ... Don't want much, do they?”

“Well, it's a very responsible job, isn't it?” said Hermione absently. She was poring over a bright pink-and-orange leaflet that was headed **SO YOU THINK YOU'D LIKE TO WORK IN MUGGLE RELATIONS?** “You don't seem to need many qualifications to liaise with Muggles. ... All they want is an O.W.L. in Muggle Studies. ... *‘Much more important is your enthusiasm, patience, and a good sense of fun!’*”

“You'd need more than a good sense of fun to liaise with my uncle,” said Harry darkly. “Good sense of when to duck, more like ...” He was halfway through a pamphlet on Wizard banking. “Listen to this:

“*‘Are you seeking a challenging career involving travel, adventure, and substantial, danger-related treasure bonuses? Then consider a position with Gringotts Wizarding Bank, who are currently recruiting Curse-Breakers for thrilling opportunities abroad. ...’*

…』でも、『数占い』が必要だ。ハーマイオニー、君ならできるよ！」

「私、銀行にはあんまり興味ないわ」ハーマイオニーが漠然と言った。

今度は別の小冊子に熱中している。

「君はトロールをガードマンとして訓練する能力を持っているか？」

「オッス」ハリーの耳に声が飛び込んできた。

振り返ると、フレッドとジョージが来ていた。

「ジニーが、君のことで相談に来た」フレッドが、三人の前のテーブルに足を投げ出したので、魔法省の進路に関する小冊子が数冊、床に滑り落ちた。

「ジニーが言ってたけど、シリウスと話したいんだって？」

「えーっ？」ハーマイオニーが鋭い声をあげ、「魔法事故 惨事部でバーンと行こう」に伸ばしかけた手が途中で止まった。

「うん……」ハリーは何気ない言い方をしようとした。

「まあ、そうできたらとー」

「バカなこと言わないで」ハーマイオニーが背筋を伸ばし、信じられないという目つきでハリーを見た。

「アンブリッジが暖炉を探り回ってるし、ふくろうは全部ボディチェックされてるのに？」

「まあ、俺たちなら、それも回避できると思うね」ジョージが伸びをしてニヤッと笑った。

「ちょっと騒ぎを起こせばいいのさ。さて、お気づきとは思いますがね、俺たちはこのイースター休暇中、混乱戦線ではかなりおとなしくしていたろ？」

「せっかくの休暇だ。それを混乱させる意味があるか？」フレッドがあとを続けた。

「俺たちは自問したよ。そしてまったく意味はないと自答したね。それに、もちろん、みんなの学習を乱すことにもなりかねないし、そんなことは俺たちとしては絶対にしたくないからな」

フレッドはハーマイオニーに向かって、神妙にちょっと頷いてみせた。

They want Arithmancy, though. ... You could do it, Hermione!”

“I don’t much fancy banking,” said Hermione vaguely, now immersed in HAVE YOU GOT WHAT IT TAKES TO TRAIN SECURITY TROLLS?

“Hey,” said a voice in Harry’s ear. He looked around; Fred and George had come to join them. “Ginny’s had a word with us about you,” said Fred, stretching out his legs on the table in front of them and causing several booklets on careers with the Ministry of Magic to slide off onto the floor. “She says you need to talk to Sirius?”

“What?” said Hermione sharply, freezing with her hand halfway toward picking up MAKE A BANG AT THE DEPARTMENT OF MAGICAL ACCIDENTS AND CATASTROPHES.

“Yeah ...” said Harry, trying to sound casual, “yeah, I thought I’d like —”

“Don’t be so ridiculous,” said Hermione, straightening up and looking at him as though she could not believe her eyes. “With Umbridge groping around in the fires and frisking all the owls?”

“Well, we think we can find a way around that,” said George, stretching and smiling. “It’s a simple matter of causing a diversion. Now, you might have noticed that we have been rather quiet on the mayhem front during the Easter holidays?”

“What was the point, we asked ourselves, of disrupting leisure time?” continued Fred. “No point at all, we answered ourselves. And of course, we’d have messed up people’s studying too, which would be the very last thing we’d want to do.”

He gave Hermione a sanctimonious little nod. She looked rather taken aback by this

そんな思いやりに、ハーマイオニーはちょっと驚いた顔をした。

「しかし、明日からは平常営業だ」フレッドはきびきびと話を続けた。

「そして、ちょっと騒ぎをやらかすなら、ハリーがシリウスと軽く話ができるようにやってはどうだろう？」

「そうね、でもやっぱり」ハーマイオニーは、相当鈍い人にとっても単純なことを説明するような雰囲気と言った。

「騒ぎで気を逸らすことができたとしても、ハリーはどうやってシリウスと話をするの？」

「アンブリッジの部屋だ」ハリーが静かに言った。

この二週間、ハリーはずっと考えていたが、それ以外の選択肢は思いつかなかった。見張られていないのは自分の暖炉だけだと、アンブリッジ自身がハリーに言った。

「あなた——気は——確か？」ハーマイオニーが声をひそめた。

ロンは茸栽培業の案内ビラを持ったまま、成り行きを用心深く眺めていた。

「確かだと思うけど」ハリーが肩をすくめた。

「それじゃ、第一どうやってあの部屋に入り込むの？」

ハリーはもう答えを準備していた。

「シリウスのナイフ」

「それ、何？」

「一昨年のクリスマスに、シリウスが、どんな錠でも開けるナイフをくれたんだ」ハリーが言った。

「だから、あいつがドアに呪文をかけて、アロホモラが効かないようにしていても、絶対にそうしてるはずだけどー」

「あなたはと思うの？」ハーマイオニーがロンに水を向けた。

ハリーはふとウィーズリーおばさんのことを思い出してしまった。

グリモールド プレイスで、ハリーにとっての最初の夕食のとき、おばさんはおじさんに向かって助けを求めたっけ。

「さあ」意見を求められたことで、ロンはびっくりした顔をした。

thoughtfulness.

“But it’s business as usual from tomorrow,” Fred continued briskly. “And if we’re going to be causing a bit of uproar, why not do it so that Harry can have his chat with Sirius?”

“Yes, but *still*,” said Hermione with an air of explaining something very simple to somebody very obtuse, “even if you *do* cause a diversion, how is Harry supposed to talk to him?”

“Umbridge’s office,” said Harry quietly.

He had been thinking about it for a fortnight and could think of no alternative; Umbridge herself had told him that the only fire that was not being watched was her own.

“Are — you — insane?” said Hermione in a hushed voice.

Ron had lowered his leaflet on jobs in the cultivated fungus trade and was watching the conversation warily.

“I don’t think so,” said Harry, shrugging.

“And how are you going to get in there in the first place?”

Harry was ready for this question.

“Sirius’s knife,” he said.

“Excuse me?”

“Christmas before last Sirius gave me a knife that’ll open any lock,” said Harry. “So even if she’s bewitched the door so *Alohomora* won’t work, which I bet she has —”

“What do you think about this?” Hermione demanded of Ron, and Harry was reminded irresistibly of Mrs. Weasley appealing to her husband during Harry’s first dinner in Grimmauld Place.

“I dunno,” said Ron, looking alarmed at being asked to give an opinion. “If Harry wants to do it, it’s up to him, isn’t it?”

「ハリーがそうしたければ、ハリーの問題だろ？」

「さすが真の友、そしてウィーズリー一族らしい答えだ」フレッドがロンの背中をバンと叩いた。

「よーし、それじゃ俺たちは、明日、最後の授業の直後にやらかそうと思う。なにせ、みんなが廊下に出ているときこそ最高に効果が上がるからな。――ハリー、俺たちは東棟のどっかで仕掛けて、アンブリッジを部屋から引き離す。――たぶん、君に保証できる時間は、そうだな、二十分はどうだ？」フレッドがジョージの顔を見た。

「軽い、軽い」ジョージが言った。

「どんな騒ぎを起こすんだい？」ロンが聞いた。

「弟よ、見てのお楽しみだ」ジョージと揃って腰を上げながら、フレッドが言った。

「明日の午後五時ごろ、『おべんちゃらのグレゴリー像』のある廊下のほうに歩いてくれば、どっちにしろ見えるさ」

次の日、ハリーは早々と目が覚めた。

魔法省での懲戒尋問があった目の朝とほとんど同じぐらい不安だった。

アンブリッジの部屋に忍び込んで、シリウスと話をするためにその部屋の暖炉を使うということだけが、不安だったのではない。

もちろんそれだけでも十分に大変なことだったが、その上今日は、スネイプの研究室から放り出されて以来初めて、スネイプの近くに行くことになるのだ。

ハリーはその日一日のことを考えながらしばらくベッドに横たわっていたが、やがてそっと起き出し、ネビルのベッド脇の窓際まで行って外を眺めた。

すばらしい夜明けだった。

空はオパールのように朧に霞み、青く澄んだ光を放っている。

まっすぐ向こうに、高く聳えるブナの古い木が見えた。

ハリーの父親がかつて、あの木の下でスネイプを苦しめた。

「憂いの籐」でハリーが見たことを帳消しにしてくれるような何かを、シリウスが言ってくれるかどうか、ハリーにはわからなかつ

“Spoken like a true friend and Weasley,” said Fred, clapping Ron hard on the back. “Right, then. We’re thinking of doing it tomorrow, just after lessons, because it should cause maximum impact if everybody’s in the corridors — Harry, we’ll set it off in the east wing somewhere, draw her right away from her own office — I reckon we should be able to guarantee you, what, twenty minutes?” he said, looking at George.

“Easy,” said George.

“What sort of diversion is it?” asked Ron.

“You’ll see, little bro,” said Fred, as he and George got up again. “At least, you will if you trot along to Gregory the Smarmy’s corridor round about five o’clock tomorrow.”

Harry awoke very early the next day, feeling almost as anxious as he had done on the morning of his hearing at the Ministry of Magic. It was not only the prospect of breaking into Umbridge’s office and using her fire to speak to Sirius that was making him feel nervous, though that was certainly bad enough — today also happened to be the first time he would be in close proximity with Snape since Snape had thrown him out of his office, as they had Potions that day.

After lying in bed for a while thinking about the day ahead, Harry got up very quietly and moved across to the window beside Neville’s bed, staring out on a truly glorious morning. The sky was a clear, misty, opalescent blue. Directly ahead of him, Harry could see the towering beech tree below which his father had once tormented Snape. He was not sure what Sirius could possibly say to him that would make up for what he had seen in the Pensieve, but he was desperate to hear Sirius’s own account of what had happened, to know of any mitigating factors there might have been, any

た。
しかし、どうしても、シリウス自身の口から、あの事件の説明が聞きかった。
何でもいいから、情状酌量の余地があれば知りたい。
父親の振舞いの口実がほしい……。
ふと何かはハリーの目を捕らえた。
禁じられた森の外れで動くものがある。
朝目に目を細めて見ると、ハグリッドが木の間から現れるのが見えた。
足を引きずっているようだ。
ずっと見てみると、ハグリッドはよろめきながら小屋の戸に辿り着き、その中に消えた。
ハリーはしばらく小屋を見つめていた。
ハグリッドはもう出てこなかったが、煙突から煙がくるくると立ちの昇った。
どうやら、火が熾せないほどひどい怪我ではなかったらしい。
ハリーは窓際から離れ、トランクのほうに戻って着替えはじめた。
アンブリッジの部屋に侵入する企てがある以上、今日という日が安らかであるとは期待していなかった。
しかし、ハーマイオニーがほとんどひっきりなしに、五時にやろうとしている計画をやめさせようと、ハリーを説得するのは計算外だった。
ピンズ先生の「魔法史」の授業中、ハーマイオニーは少なくともハリーやロンと同じぐらい注意力散漫だった。
そんなことはいままでなかった。
小声でハリーを忠告攻めにし、聞き流すのがひと苦労だった。
「……それに、アンブリッジがあそこであなたを捕まえてごらんない。退学処分だけじゃすまないわよ。スナッフズと話をしていたと推量して、今度こそきつと、無理やりあなたに『真実薬』を飲ませて質問に答えさせるわ……」
「ハーマイオニー」ロンが憤慨した声で囁いた。
「ハリーに説教するのをやめて、ピンズの講義を聞くつもりあるのか？ それとも僕が自分でノートを取らなきゃならないのか？」
「たまには自分で取ったっていいでしょ！」

excuse at all for his father's behavior. ...

Something caught Harry's attention: movement on the edge of the Forbidden Forest. Harry squinted into the sun and saw Hagrid emerging from between the trees. He seemed to be limping. As Harry watched, Hagrid staggered to the door of his cabin and disappeared inside it. Harry watched the cabin for several minutes. Hagrid did not emerge again, but smoke furled from the chimney, so Hagrid could not be so badly injured that he was unequal to stoking the fire. ...

Harry turned away from the window, headed back to his trunk, and started to dress.

With the prospect of forcing entry into Umbridge's office ahead, Harry had never expected the day to be a restful one, but he had not reckoned on Hermione's almost continual attempts to dissuade him from what he was planning to do at five o'clock. For the first time ever, she was at least as inattentive to Professor Binns in History of Magic as Harry and Ron were, keeping up a stream of whispered admonitions that Harry tried very hard to ignore.

"... and if she does catch you there, apart from being expelled, she'll be able to guess you've been talking to Snuffles and this time I expect she'll *force* you to drink Veritaserum and answer her questions. ..."

"Hermione," said Ron in a low and indignant voice, "are you going to stop telling Harry off and listen to Binns, or am I going to have to take notes instead?"

"You take notes for a change, it won't kill you!"

By the time they reached the dungeons, neither Harry nor Ron was speaking to Hermione any longer. Undeterred, she took advantage of their silence to maintain an

地下牢教室に行くころには、ハリーもロンもハーマイオニーに口をきかなくなっていた。めげるところか、ハーマイオニーは二人が黙っているのをいいことに、恐ろしい警告をひっきりなしに流し続けた。声をひそめて言うので、激しいシューッという音になり、シェーマスは自分の大鍋が漏れているのではないかと調べて、まるまる五分をむだにした。一方スネイプは、ハリーが透明であるかのように振舞うことにしたらしい。もちろん、ハリーはこの戦術には慣れっこだった。バーノン叔父さんの得意技の一つだ。結局、もっとひどい仕打ちにならなかったのが、ハリーにはありがたかった。事実、嘲りや、ねちねちと傷つけるような言葉に耐えなければならなかったこれまでに比べれば、この新しいやり方はましだと思った。そして、まったく無視されれば、「強化薬」も、たやすく調合できるとわかってうれしかった。授業の最後に、薬の一部をフラスコにすくい取り、コルク栓をして、採点してもらうためにスネイプの机のところまで持っていった。ついに、どうにか「期待以上」の「E」がもらえるかも知れないと思った。提出して後ろを向いたとたん、ハリーはガチャンと何かが碎ける音を聞いた。マルフォイが大喜びで笑い声をあげた。ハリーはくると振り返った。ハリーの提出した薬が粉々になって床に落ちていた。スネイプが、いい気味だという目で、ハリーを見てほくそ笑んでいた。「おーっと」スネイプが小声で言った。「これじゃ、また零点だな、ポッター」ハリーは怒りで言葉も出なかった。もう一度フラスコに詰めて、是が非でもスネイプに採点させてやろうと、ハリーは大腿で自分の大鍋に戻った。ところがなんと、鍋に残った薬が消えていた。「ごめんなさい！」ハーマイオニーが両手で口を覆った。「本当にごめんなさい、ハリー。あなたがも

uninterrupted flow of dire warnings, all uttered under her breath in a vehement hiss that caused Seamus to waste five whole minutes checking his cauldron for leaks.

Snape, meanwhile, seemed to have decided to act as though Harry were invisible. Harry was, of course, well used to this tactic, as it was one of Uncle Vernon's favorites, and on the whole was grateful he had to suffer nothing worse. In fact, compared to what he usually had to endure from Snape in the way of taunts and snide remarks, he found the new approach something of an improvement and was pleased to find that when left well alone, he was able to concoct an Invigoration Draught quite easily. At the end of the lesson he scooped some of the potion into a flask, corked it, and took it up to Snape's desk for marking, feeling that he might at last have scraped an E.

He had just turned away when he heard a smashing noise; Malfoy gave a gleeful yell of laughter. Harry whipped around again. His potion sample lay in pieces on the floor, and Snape was watching him with a look of gloating pleasure.

"Whoops," he said softly. "Another zero, then, Potter ..."

Harry was too incensed to speak. He strode back to his cauldron, intending to fill another flask and force Snape to mark it, but saw to his horror that the rest of the contents had vanished.

"I'm sorry!" said Hermione with her hands over her mouth. "I'm really sorry, Harry, I thought you'd finished, so I cleared up!"

Harry could not bring himself to answer. When the bell rang he hurried out of the dungeon without a backward glance and made sure that he found himself a seat between Neville and Seamus for lunch so that Hermione could not start nagging him about using

う終わったと思って、きれいにしてしまったの！」

ハリーは答える気にもなれなかった。終業ベルが鳴ったとき、ハリーはチラとも振り返らず地下牢教室を飛び出した。昼食の間はわざわざネビルとシェーマスの間に座り、アンブリッジの部屋を使う件で、ハーマイオニーがまたガミガミ言いはじめたりできないようにした。

「占い学」のクラスに着くころには、ハリーの機嫌は最悪で、マクゴナガル先生との進路指導の約束をすっかり忘れていた。

ロンにどうして先生の部屋に行かないのかと聞かれて、やっと思い出し、飛ぶように階段を駆け戻り、息せき切って到着したときは、数分遅れただけだった。

「先生、すみません」ハリーは息を切らしてドアを閉めながら謝った。

「僕、忘れていました」

「かまいません。ポッター」マクゴナガル先生がきびきびと言った。

ところが、そのとき、誰かが隅のほうでフンフン鼻を鳴らした。

ハリーは振り返った。アンブリッジ先生が座っていた。

膝にはクリップボードを載せ、首の周りはこちらこちらうるさいフリルで囲み、悦に入った気持ちの悪い薄ら笑いを浮かべている。

「お掛けなさい、ポッター」マクゴナガル先生が素っ気なく言った。

机に散らばっているたくさんの案内書を整理しながら、先生の手がわずかに震えていた。ハリーはアンブリッジに背を向けて腰掛け、クリップボードに羽根ペンで書く音が聞こえないふりをするよう努力した。

「さて、ポッター、この面接は、あなたの進路に関して話し合い、六年目、七年目でどの学科を継続するかを決める指導をするためのものです」マクゴナガル先生が言った。

「ホグワーツ卒業後、何をしたいか、考えがありますか？」

「えーと、」ハリーが言った。

後ろでカリカリ音がするのでとても気が散った。

「何ですか？」マクゴナガル先生が促した。

Umbridge's office again.

He was in such a bad mood by the time that he got to Divination that he had quite forgotten his career appointment with Professor McGonagall, remembering only when Ron asked him why he wasn't in her office. He hurtled back upstairs and arrived out of breath, only a few minutes late.

“Sorry, Professor,” he panted, as he closed the door. “I forgot. ...”

“No matter, Potter,” she said briskly, but as she spoke, somebody else sniffed from the corner. Harry looked around.

Professor Umbridge was sitting there, a clipboard on her knee, a fussy little pie-frill around her neck, and a small, horribly smug smile on her face.

“Sit down, Potter,” said Professor McGonagall tersely. Her hands shook slightly as she shuffled the many pamphlets littering her desk.

Harry sat down with his back to Umbridge and did his best to pretend he could not hear the scratching of her quill on her clipboard.

“Well, Potter, this meeting is to talk over any career ideas you might have, and to help you decide which subjects you should continue into sixth and seventh years,” said Professor McGonagall. “Have you had any thoughts about what you would like to do after you leave Hogwarts?”

“Er,” said Harry.

He was finding the scratching noise from behind him very distracting.

“Yes?” Professor McGonagall prompted Harry.

“Well, I thought of, maybe, being an Auror,” Harry mumbled.

“You'd need top grades for that,” said

「あの、考えたのは、『闇被い』はどうか
あと」ハリーはモゴモゴ言った。

「それには、最優秀の成績が必要です」マク
ゴナガル先生はそう言うと、机の上の書類の
山から、小さな黒い小冊子を抜き出して開い
た。

「NEWTは少なくとも五科目パスすること
が要求され、しかも「E 期待以上」より下
の成績は受け入れられません。なるほど。そ
れから、闇被い本部で、一連の厳しい性格
適性テストがあります。狭き門ですよ、ポッ
ター、最高の者しか採りません。事実、この
三年間は一人も採用されていないと思いま
す」

このときアンブリッジ先生が、小さく咳をし
た。

まるでどれだけ静かに咳ができるのかを試し
たかのようにだった。

マクゴナガル先生は無視した。

「どの科目を取るべきか知りたいでしょ
うね？」マクゴナガル先生は前より少し声を張
りあげて話した。

「はい」ハリーが答えた。

「『闇の魔術に対する防衛術』、なんかです
ね？」

「当然です」マクゴナガル先生がきっぱり言
った。

「そのほか私が勧めるのは――」アンブリッ
ジ先生が、また咳をした。

今度はさっきより少し聞こえた。

マクゴナガル先生は一瞬目を閉じ、また開け
て、何事もなかったかのように続けた。

「そのほか『変身術』を勧めます。なぜな
ら、闇被いは往々にして、仕事上変身したり
元に戻ったりする必要があります。それで、
いまはっきり言っておきますが、ポッター、
私のNEWTのクラスには、OWLレベルで
『E 期待以上』つまり『良』以上を取った
者でなければ入れません。あなたはいま平均
で『A まあまあ』つまり『可』です。継続
するチャンスがほしいなら、今度の試験まで
に相当がんばる必要があります。さらに『呪
文学』です。これは常に役に立ちます。それ
と、『魔法薬学』。そうです、ポッター、
『魔法薬学』ですよ」

Professor McGonagall, extracting a small, dark
leaflet from under the mass on her desk and
opening it. “They ask for a minimum of five
N.E.W.T.s, and nothing under ‘Exceeds
Expectations’ grade, I see. Then you would be
required to undergo a stringent series of
character and aptitude tests at the Auror office.
It’s a difficult career path, Potter; they only
take the best. In fact, I don’t think anybody has
been taken on in the last three years.”

At this moment Professor Umbridge gave a
very tiny cough, as though she was trying to
see how quietly she could do it. Professor
McGonagall ignored her.

“You’ll want to know which subjects you
ought to take, I suppose?” she went on, talking
a little more loudly than before.

“Yes,” said Harry. “Defense Against the
Dark Arts, I suppose?”

“Naturally,” said Professor McGonagall
crisply. “I would also advise —”

Professor Umbridge gave another cough, a
little more audible this time. Professor
McGonagall closed her eyes for a moment,
opened them again, and continued as though
nothing had happened.

“I would also advise Transfiguration,
because Aurors frequently need to Transfigure
or Untransfigure in their work. And I ought to
tell you now, Potter, that I do not accept
students into my N.E.W.T. classes unless they
have achieved ‘Exceeds Expectations’ or
higher at Ordinary Wizarding Level. I’d say
you’re averaging ‘Acceptable’ at the moment,
so you’ll need to put in some good hard work
before the exams to stand a chance of
continuing. Then you ought to do Charms,
always useful, and Potions. Yes, Potter,
Potions,” she added, with the merest flicker of
a smile. “Poisons and antidotes are essential
study for Aurors. And I must tell you that

マクゴナガル先生は、にこりともせずにつけ加えた。

「闇祓いにとって、毒薬と解毒剤を学ぶことは不可欠です。それに、言っておかなければなりませんが、スネイプ先生はO.W.L.で

『O 優』を取った者以外は絶対に教えません。ですから――」

アンブリッジ先生はこれまでで一番はっきり聞こえる咳をした。

「喉飴を差し上げましょうか、ドローレス」マクゴナガル先生は、アンブリッジ先生のほうを見もせずに、素っ気なく言った。

「あら、結構ですわ、ご親切にどうも」アンブリッジはハリーの大嫌いな例のニタニタ笑いをした。

「ただね、ミネルバ、ほんの一口を挟んでもよろしいかしら？」

「どのみちそうなるでしょう」マクゴナガル先生は、歯を食いしばったまま言った。

「ミスター ポッターは、性格的に果たして闇祓いに向いているのかしらと思いましたの」

アンブリッジ先生は甘ったるく言った。

「そうですか？」マクゴナガル先生は高飛車に言った。

「さて、ポッター」何も聞かなかったかのよう、先生が言葉を続けた。

「真剣にその志を持つなら、『変身術』と『魔法薬学』を最低線まで持っていけるよう集中して努力することを勧めます。フリットウィック先生のあなたの評価は、この二年間、『A』と『E』の中間のようです。ですから、『呪文学』は満足できるようです。

『闇の魔術に対する防衛術』ですが、あなたの点数はこれまでずっと、全般的に高いです。とくにルービン先生は、あなたのことを――喉飴は本当に要らないのですか、ドローレス？」

「あら、要りませんわ。どうも、ミネルバ」アンブリッジ先生は、これまでで最大の咳をしたところだった。

「一番最近の『闇の魔術に対する防衛術』のハリーの成績を、もしやお手元にお持ちではないのではと、わたくし、ちょっと気になりましたの。間違いなくメモを挟んでおいたと

Professor Snape absolutely refuses to take students who get anything other than ‘Outstanding’ in their O.W.L.s, so —”

Professor Umbridge gave her most pronounced cough yet.

“May I offer you a cough drop, Dolores?” Professor McGonagall asked curtly, without looking at Professor Umbridge.

“Oh no, thank you very much,” said Umbridge, with that simpering laugh Harry hated so much. “I just wondered whether I could make the teensiest interruption, Minerva?”

“I daresay you’ll find you can,” said Professor McGonagall through tightly gritted teeth.

“I was just wondering whether Mr. Potter has *quite* the temperament for an Auror?” said Professor Umbridge sweetly.

“Were you?” said Professor McGonagall haughtily. “Well, Potter,” she continued, as though there had been no interruption, “if you are serious in this ambition, I would advise you to concentrate hard on bringing your Transfiguration and Potions up to scratch. I see Professor Flitwick has graded you between ‘Acceptable’ and ‘Exceeds Expectations’ for the last two years, so your Charm work seems satisfactory; as for Defense Against the Dark Arts, your marks have been generally high, Professor Lupin in particular thought you — *are you quite sure you wouldn’t like a cough drop, Dolores?*”

“Oh, no need, thank you, Minerva,” simpered Professor Umbridge, who had just coughed her loudest yet. “I was just concerned that you might not have Harry’s most recent Defense Against the Dark Arts marks in front of you. I’m quite sure I slipped in a note ...”

“What, this thing?” said Professor

思いますわ」

「このことですか？」マクゴナガル先生は、ハリーのファイルの中から、ピンクの羊皮紙を引っ張り出しながら、嫌悪感を声に顕にした。

眉を少し吊り上げてメモに目を通し、それからマクゴナガル先生は、何も言わずにそのままファイルに戻した。

「さて、ポッター、いま言いましたように、ルービン先生は、あなたがこの学科に卓越した適性を示したとお考えでした。当然、闇祓いにとっては——」

「わたくしのメモがおわかりになりませんでしたの？ ミネルバ？」アンブリッジ先生が、咳をするのも忘れて甘ったるく言った。

「もちろん理解しました」マクゴナガル先生は、言葉がくぐもって聞こえるほどギリギリ歯を食いしばった。

「あら、それでしたら、どうしたことかしら……わたくしにはどうもわかりませんわ。どうしてまた、ミスター ポッターにむだな望みを——」

「むだな望み？」マクゴナガル先生は、頑なにアンブリッジ先生のほうを見ずに、繰り返した。

「『闇の魔術に対する防衛術』のすべてのテストで、この子は高い成績を収めています——」

「お言葉を返すようで、大変申し訳ございませんが、ミネルバ、わたくしのメモにありますように、ハリーはわたくしのクラスでは大変ひどい成績ですの。もっとはっきり申し上げるべきでしたわ」マクゴナガル先生がついにアンブリッジを真正面から見た。

「この子は、有能な教師によって行われた『闇の魔術に対する防衛術』のすべてのテストで、高い成績を収めています」

電球が突然切れるように、アンブリッジ先生の笑みが消えた。

椅子に座り直し、クリップボードの紙を一枚捲って猛スピードで書き出し、ギョロ目が、右へ左へとゴロゴロ動いた。

マクゴナガル先生は、骨ばった鼻の穴を膨らませ、目をギラギラさせてハリーに向き直った。

McGonagall in a tone of revulsion, as she pulled a sheet of pink parchment from between the leaves of Harry's folder. She glanced down it, her eyebrows slightly raised, then placed it back into the folder without comment.

“Yes, as I was saying, Potter, Professor Lupin thought you showed a pronounced aptitude for the subject, and obviously for an Auror —”

“Did you not understand my note, Minerva?” asked Professor Umbridge in honeyed tones, quite forgetting to cough.

“Of course I understood it,” said Professor McGonagall, her teeth clenched so tightly that the words came out a little muffled.

“Well, then, I am confused. ... I'm afraid I don't quite understand how you can give Mr. Potter false hope that —”

“False hope?” repeated Professor McGonagall, still refusing to look round at Professor Umbridge. “He has achieved high marks in all his Defense Against the Dark Arts tests —”

“I'm terribly sorry to have to contradict you, Minerva, but as you will see from my note, Harry has been achieving very poor results in his classes with me —”

“I should have made my meaning plainer,” said Professor McGonagall, turning at last to look Umbridge directly in the eyes. “He has achieved high marks in all Defense Against the Dark Arts tests set by a competent teacher.”

Professor Umbridge's smile vanished as suddenly as a lightbulb blowing. She sat back in her chair, turned a sheet on her clipboard, and began scribbling very fast indeed, her bulging eyes rolling from side to side. Professor McGonagall turned back to Harry, her thin nostrils flared, her eyes burning.

「何か質問は？ ポッター？」

「はい」ハリーが聞いた。

「もしちゃんとNEW Tの点が取れたら、魔法省はどんな性格 適性試験をするのですか？」

「そうですね、圧力に抵抗する能力を発揮するとか」マクゴナガル先生が答えた。

「忍耐や献身も必要です。なぜなら、闇袂いの訓練は、さらに三年を要するのです。言うまでもなく、実践的な防衛術の高度な技術も必要です。卒業後もさらなる勉強があるということです。ですから、その決意がなければ——」

「それに、どうせわかることですが」いまやひやりと冷たくなった声で、アンブリッジが言った。

「魔法省は闇袂いを志願する者の経歴を調べます。犯罪歴を」

「——hogwartsを出てから、さらに多くの試験を受ける決意がなければ、むしろ他の——」

「つまり、この子が闇袂いになる確率は、ダンブルドアがこの学校に戻ってくる可能性と同じということです」

「それなら、大いに可能性あります」マクゴナガル先生が言った。

「ポッターは犯罪歴があります」アンブリッジが声を張りあげた。

「ポッターはすべての件で無罪になりました」

マクゴナガルがもっと声を張りあげた。アンブリッジ先生が立ち上がった。

とにかく背が低く、立っても大して変わりはない。

しかし、小うるさい、愛想笑いの物腰が消え、猛烈な怒りのせいで、だだっ広い弛んだ顔が妙に邪悪に見えた。

「ポッターが闇袂いになる可能性はまったくありません」

マクゴナガル先生も立ち上がった。

こちらの立ち上がりぶりのほうがずっと迫力があつた。

マクゴナガル先生はアンブリッジ先生を高めから見下した。

「ポッター」マクゴナガル先生の声が凜と響

“Any questions, Potter?”

“Yes,” said Harry. “What sort of character and aptitude tests do the Ministry do on you, if you get enough N.E.W.T.s?”

“Well, you’ll need to demonstrate the ability to react well to pressure and so forth,” said Professor McGonagall, “perseverance and dedication, because Auror training takes a further three years, not to mention very high skills in practical defense. It will mean a lot more study even after you’ve left school, so unless you’re prepared to —”

“I think you’ll also find,” said Umbridge, her voice very cold now, “that the Ministry looks into the records of those applying to be Aurors. Their criminal records.”

“— unless you’re prepared to take even more exams after Hogwarts, you should really look at another —”

“— which means that this boy has as much chance of becoming an Auror as Dumbledore has of ever returning to this school.”

“A very good chance, then,” said Professor McGonagall.

“Potter has a criminal record,” said Umbridge loudly.

“Potter has been cleared of all charges,” said Professor McGonagall, even more loudly.

Professor Umbridge stood up. She was so short that this did not make a great deal of difference, but her fussy, simpering demeanor had given place to a hard fury that made her broad, flabby face look oddly sinister.

“Potter has no chance whatsoever of becoming an Auror!”

Professor McGonagall got to her feet too, and in her case this was a much more impressive move. She towered over Professor Umbridge.

いた。

「どんなことがあろうと、私はあなたが闇祓いになるよう援助します！毎晩手ずから教えることになろうとも、あなたが必要とされる成績を絶対に取れるようにしてみせます！」

「魔法大臣は絶対にポッターを採用しません！」

アンブリッジの声は怒りで上ずっていた。

「ポッターに準備ができるころには、新しい魔法大臣になっているかもしれません！」マクゴナガル先生が叫んだ。

「はっは一ん！」アンブリッジ先生がずんぐりした指でマクゴナガルを指し、金切り声で言った。

「ほーら！ほら、ほら、ほら！それがお望みなものね？ミネルバ マクゴナガル？あなたはアルバス ダンブルドアがコーネリウス ファッジに取って代わればいいと思っている！わたくしのいまの地位に就くことを考えているんだわ。なんと、魔法大臣上級次官並びに校長の地位に！」

「何を戯言を」マクゴナガル先生は見事に蔑んだ。

「ポッター。これで進路相談は終了ですハリーはカバンを肩に背負い、敢えてアンブリッジ先生を見ずに、急いで部屋を出た。二人の舌戦が、廊下を戻る間ずっと続いていた。

その日の午後の授業で、「闇の魔術に対する防衛術」の教室に荒々しく入ってきたアンブリッジ先生は、短距離レースを走った直後のように、まだ息を弾ませていた。

「ハリー、計画を考え直してくれないかしら」教科書の第三十四章「報復ではなく交渉を」のページを開いたとたん、ハーマイオニーが囁いた。

「アンブリッジったら、もう相当陰悪ムードよ……」

時折、アンブリッジが恐い目でハリーを睨みつけた。

ハリーは俯いたまま、虚ろな目で「防衛術の理論」の教科書を見つめ、じっと考えていた……。

マクゴナガル先生がハリーの後ろ盾になってくってから数時間も経たないうちに、ハリー

“Potter,” she said in ringing tones, “I will assist you to become an Auror if it is the last thing I do! If I have to coach you nightly I will make sure you achieve the required results!”

“The Minister of Magic will never employ Harry Potter!” said Umbridge, her voice rising furiously.

“There may well be a new Minister of Magic by the time Potter is ready to join!” shouted Professor McGonagall.

“Aha!” shrieked Professor Umbridge, pointing a stubby finger at McGonagall. “Yes! Yes, yes, yes! Of course! That’s what you want, isn’t it, Minerva McGonagall? You want Cornelius Fudge replaced by Albus Dumbledore! You think you’ll be where I am, don’t you, Senior Undersecretary to the Minister and headmistress to boot!”

“You are raving,” said Professor McGonagall, superbly disdainful. “Potter, that concludes our career consultation.”

Harry swung his bag over his shoulder and hurried out of the room, not daring to look at Umbridge. He could hear her and Professor McGonagall continuing to shout at each other all the way back along the corridor.

Professor Umbridge was still breathing as though she had just run a race when she strode into their Defense Against the Dark Arts lesson that afternoon.

“I hope you’ve thought better of what you were planning to do, Harry,” Hermione whispered, the moment they had opened their books to chapter thirty-four (“Non-Retaliation and Negotiation”). “Umbridge looks like she’s in a really bad mood already. …”

Every now and then Umbridge shot glowering looks at Harry, who kept his head down, staring at *Defensive Magical Theory*, his eyes unfocused, thinking. …

がアンブリッジの部屋に侵入して捕まったりしたら、先生がどんな反応を見せるか、ハリーには想像できる……このままおとなしくグリフィンボール塔に戻り、次の夏休みの間に、「憂いの篩」で目撃した光景についてシリウスに尋ねる機会を待つ。これでいいではないか……これでもいいはずだ。しかし、そんな良識的な行動を取るとすると、まるで胃袋に鉛の錘が落とされたような気分になる……それに、フレッドとジョージのことがある。陽動作戦はもう動きだしている。その上、シリウスからもらったナイフは、父親からの「透明マント」と一緒に、いまカバンに収まっている。しかし、もし捕まったらという懸念は残る……。

「ダンブルドアは、あなたが学校に残れるように、犠牲になったのよ、ハリー！」アンブリッジに見えないよう、教科書を顔のところまで持ち上げて、ハーマイオニーが囁いた。

「もし今日放り出されたら、それも水の泡じゃない！」

計画を放棄して、二十年以上前のある夏の日、父親がしたこと、記憶を抱えたまま生きること、できるだろう……。

しかしそのとき、ハリーは上の階のグリフィンボールの談話室の暖炉で、シリウスが言ったことを思い出した。

「君はわたしが考えていたほど父親似ではないな。ジェームズなら危険なおもしろがっただろう……」

だが、僕はいまでも父さんに似ていたいと思っているだろうか。

「ハリー、やらないで。お願いだから！」

終業のベルが鳴ったときのハーマイオニーの声は、苦悶に満ちていた。

ハリーは答えなかった。どうしていいかわからなかった。

ロンは何も意見を言わず、助言もしないと決めているかのようだった。

ハリーのほうを見ようとしなかった。

しかし、ハーマイオニーがもう一度ハリーを止めようと口を開くと、低い声で言った。

「いいから、もうやめろよ。ハリーが自分で決めることだ」教室から出るとき、ハリーの

He could just imagine Professor McGonagall's reaction if he were caught trespassing in Professor Umbridge's office mere hours after she had vouched for him. ... There was nothing to stop him simply going back to Gryffindor Tower and hoping that sometime during the next summer holiday he would have a chance to ask Sirius about the scene he had witnessed in the Pensieve. ... Nothing, except that the thought of taking this sensible course of action made him feel as though a lead weight had dropped into his stomach. ... And then there was the matter of Fred and George, whose diversion was already planned, not to mention the knife Sirius had given him, which was currently residing in his schoolbag along with his father's old Invisibility Cloak. ...

But the fact remained that if he were caught ...

“Dumbledore sacrificed himself to keep you in school, Harry!” whispered Hermione, raising her book to hide her face from Umbridge. “And if you get thrown out today it will all have been for nothing!”

He could abandon the plan and simply learn to live with the memory of what his father had done on a summer's day more than twenty years ago. ...

And then he remembered Sirius in the fire upstairs in the Gryffindor common room. ... “You're less like your father than I thought. ... The risk would've been what made it fun for James. ...”

But did he want to be like his father anymore?

“Harry, don't do it, please don't do it!” Hermione said in anguished tones as the bell rang at the end of the class.

He did not answer; he did not know what to

心臓は早鐘のようだった。
廊下に出て半分ほど進んだとき、遠くのほうで紛れもなく陽動作戦の音が件裂するのが聞こえた。
どこか上の階から、叫び声や悲鳴が響いてきた。
ハリーの周りの教室という教室から出てきた生徒たちが、一斉に足を止め、恐々天井を見上げた。アンブリッジが、短い足なりに全速力で、教室から飛び出してきた。
杖を引っ張り出し、アンブリッジは急いで反対方向へと離れていった。
やるならいまだ。いましかない。
「ハリー——お願い！」ハーマイオニーが弱々しく哀願した。
しかし、ハリーの心は決まっていた。
カバンをしっかりと肩に掛け直し、東棟での騒ぎがいったい何かを見ようと急ぎだした生徒たちの間を縫って、ハリーは逆方向に駆けだした。
ハリーはアンブリッジの部屋がある廊下に着き、誰もいないのを確かめた。
大きな甲冑の裏に駆け込み——兜がギーッとハリーを振り返った——カバンを開けてシリウスのナイフをつかみ、ハリーは「透明マント」を被った。
それからゆっくり、慎重に甲冑の裏から出て廊下を進み、アンブリッジの部屋のドアに着いた。
ドアの周囲の隙間に魔法のナイフの刃を差し込み、そっと上下させて引き出すと、小さくカチリと音がして、ドアがパッと開いた。
ハリーは身を屈めて中に入り、急いでドアを閉め、周りを見回した。
没収された箒の上に掛かった飾り皿の中で、小憎らしい子猫がふざけている他は、何一つ動くものはなかった。
ハリーは「マント」を脱ぎ、急いで暖炉のところにいった。
探し物はすぐ見つかった。
小さな箱に入ったキラキラ光る粉、「暖炉飛行粉」だ。
ハリーは火のない火格子の前に屈んだ。
両手が震えた。
やり方はわかっているつもりだが、実際にや

do. Ron seemed determined to give neither his opinion nor his advice. He would not look at Harry, though when Hermione opened her mouth to try dissuading Harry some more, he said in a low voice, “Give it a rest, okay? He can make up his own mind.”

Harry’s heart beat very fast as he left the classroom. He was halfway along the corridor outside when he heard the unmistakable sounds of a diversion going off in the distance. There were screams and yells reverberating from somewhere above them. People exiting the classrooms all around Harry were stopping in their tracks and looking up at the ceiling fearfully —

Then Umbridge came pelting out of her classroom as fast as her short legs would carry her. Pulling out her wand, she hurried off in the opposite direction: It was now or never.

“Harry — please!” said Hermione weakly.

But he had made up his mind — hitching his bag more securely onto his shoulder he set off at a run, weaving in and out of students now hurrying in the opposite direction, off to see what all the fuss was about in the east wing. ...

Harry reached the corridor where Umbridge’s office was situated and found it deserted. Dashing behind a large suit of armor whose helmet creaked around to watch him, he pulled open his bag, seized Sirius’s knife, and donned the Invisibility Cloak. He then crept slowly and carefully back out from behind the suit of armor and along the corridor until he reached Umbridge’s door.

He inserted the blade of the magical knife into the crack around it and moved it gently up and down, then withdrew it. There was a tiny *click*, and the door swung open. He ducked inside the office, closed the door quickly

ったことはない。

ハリーは暖炉に首を突っ込んだ。

飛行粉を大きくひと掴みして、伸ばした首の下にきちんと積んである薪の上に落とした。薪はたちまちポッと燃え、エメラルド色の炎が上がった。

「グリモールド プレイス十二番地！」ハリーは大声で、はっきり言った。

これまで経験したことのない、奇妙な感覚だった。

もちろん飛行粉で移動したことはあるが、そのときは全身が炎の中でぐるぐる回転し、国中に広がる魔法使いの暖炉網を通った。

今度は、膝がアンブリッジの部屋の冷たい床にきっちり残ったままで、頭だけがエメラルドの炎の中を飛んでいく……。

そして、回りはじめたときと同じように唐突に、回転が止まった。

少し気分が悪かった。

首の周りに特別熱いマフラーを巻いているような気持ちになりながら、目を開けるとハリーはキッチンの暖炉の中にいた。誰かが長い木のテーブルに腰かけ、羊皮紙を熱心に読みふけているのが見えた。

「シリウス？」

男が飛び上がり、振り返った。

シリウスではなくルーピンだった。

「ハリー！」ルーピンがびっくり仰天して言った。

「いったい何を――どうした？ 何かあったのか？」

「ううん」ハリーが答えた。

「ただ、僕できたら――あの、つまり、ちょっと――シリウスと話したくて」

「呼んでくる」ルーピンはまだ困惑した顔で立ち上がった。

「クリーチャーを探しに上へ行ってるんだ。また屋根裏に隠れているらしい……」ルーピンが急いで厨房を出ていくのが見えた。

残されたハリーが見るものといえば、椅子とテーブルの脚しかない。

炎の中から話をするのがどんなに骨が折れることか、シリウスはどうして一度も言ってくれなかったんだろう。

ハリーの膝はもう、アンブリッジの硬い石の

behind him, and looked around.

It was empty; nothing was moving except the horrible kittens on the plates continuing to frolic on the wall above the confiscated broomsticks.

Harry pulled off his cloak and, striding over to the fireplace, found what he was looking for within seconds: a small box containing glittering Floo powder.

He crouched down in front of the empty grate, his hands shaking. He had never done this before, though he thought he knew how it must work. Sticking his head into the fireplace, he took a large pinch of powder and dropped it onto the logs stacked neatly beneath him. They exploded at once into emerald-green flames.

“Number twelve, Grimmauld Place!” Harry said loudly and clearly.

It was one of the most curious sensations he had ever experienced; he had traveled by Floo powder before, of course, but then it had been his entire body that had spun around and around in the flames through the network of Wizarding fireplaces that stretched over the country: This time, his knees remained firm upon the cold floor of Umbridge’s office, and only his head hurtled through the emerald fire. ...

And then, abruptly as it had begun, the spinning stopped. Feeling rather sick and as though he was wearing an exceptionally hot muffler around his head, Harry opened his eyes to find that he was looking up out of the kitchen fireplace at the long, wooden table, where a man sat poring over a piece of parchment.

“Sirius?”

The man jumped and looked around. It was not Sirius, but Lupin.

“Harry!” he said, looking thoroughly

床に長い間触れていることに抗議していた。まもなくルーピンが、すぐあとにシリウスを連れて戻ってきた。

「どうした？」シリウスは目にかかる長い黒髪を払い退け、ハリーと同じ目の高さになるよう暖炉前に膝をつき、急き込んで聞いた。ルーピンも心配そうな顔で脆いた。

「大丈夫か助けが必要なのか？」

「ううん」ハリーが言った。

「そんなことじゃないんだ……僕、ちょっと話したくて……父さんのことで」

二人が驚愕したように顔を見合わせた。

しかしハリーは、恥ずかしいとか、きまりが悪いとか感じている暇はなかった。

刻一刻と膝の痛みがひどくなる。

それに、陽動作戦が始まってからもう五分は経過したと思った。

ジョージが保証したのは二十分だ。

ハリーはすぐさま「憂いの篩」で見たことの話に入った。

話し終ったとき、シリウスもルーピンも一瞬黙っていた。

それからルーピンが静かに言った。

「ハリー、そこで見たことだけで君の父さんを判断しないでほしい。まだ十五歳だったんだ——」

「僕だって十五だ！」ハリーの言葉が熱くなった。

「いいか、ハリー」シリウスがなだめるように言った。

「ジェームズとスネイプは、最初に目を合わせた瞬間からお互いに憎み合っていた。そういうこともあるというのは、君にもわかるね？ ジェームズは、スネイプがなりたいたいと思っているものをすべて備えていた——人気者で、クイディッチがうまかった——ほとんど何でもよくできた。ところがスネイプは、闇の魔術に首までどっぷり浸かった偏屈なやつだった。それにジェームズは——君の目にどう映ったか別として、ハリー——どんなときも闇の魔術を憎んでいた」

「うん」ハリーが言った。

「でも、父さんは、とくに理由もないのにスネイプを攻撃した。ただ単に——え——と、シリウスが『退屈だ』と言ったからなんだ」

shocked. “What are you — what’s happened, is everything all right?”

“Yeah,” said Harry. “I just wondered — I mean, I just fancied a — a chat with Sirius.”

“I’ll call him,” said Lupin, getting to his feet, still looking perplexed. “He went upstairs to look for Kreacher, he seems to be hiding in the attic again. ...”

And Harry saw Lupin hurry out of the kitchen. Now he was left with nothing to look at but the chair and table legs. He wondered why Sirius had never mentioned how very uncomfortable it was to speak out of the fire — his knees were already objecting painfully to their prolonged contact with Umbridge’s hard stone floor.

Lupin returned with Sirius at his heels moments later.

“What is it?” said Sirius urgently, sweeping his long dark hair out of his eyes and dropping to the ground in front of the fire, so that he and Harry were on a level; Lupin knelt down too, looking very concerned. “Are you all right? Do you need help?”

“No,” said Harry, “it’s nothing like that. ... I just wanted to talk ... about my dad. ...”

They exchanged a look of great surprise, but Harry did not have time to feel awkward or embarrassed; his knees were becoming sorer by the second, and he guessed that five minutes had already passed from the start of the diversion — George had only guaranteed him twenty. He therefore plunged immediately into the story of what he had seen in the Pensieve.

When he had finished, neither Sirius nor Lupin spoke for a moment. Then Lupin said quietly, “I wouldn’t like you to judge your father on what you saw there, Harry. He was only fifteen —”

ハリーは少し申し訳なさそうな調子で言葉を結んだ。

「自慢にはならないな」シリウスが急いで言った。

ルーピンが横にいるシリウスを見ながら言った。

「いいかい、ハリー。君の父さんとシリウスは、何をやらせても学校中で一番よくできたということを、理解しておかないといけないよ。——みんなが二人は最高にかっこいいと思っていた——二人が時々少しいい気になったとしても——」

「僕たちが時々傲慢でいやなガキだったとしてもと言いたいんだろう？」シリウスが言った。

ルーピンがニヤッとした。

「父さんはしょっちゅう髪の毛をくしゃくしゃにしてた」ハリーが困惑したように言った。

シリウスもルーピンも笑い声をあげた。

「そういう癖があったのを忘れていたよ」シリウスが懐かしそうに言った。

「ジェームズはスニッチをもてあそんでいたのか？」ルーピンが興味深げに聞いた。

「うん」シリウスとルーピンが顔を見合わせ、思い出に耽るようになっこと笑うのを、理解しがたい思いで見つめながら、ハリーが答えた。

「それで……僕、父さんがちょっとバカをやっていると思った」

「ああ、当然あいつはちょっとバカをやったさ！」シリウスが威勢よく言った。

「わたしたちはみんなバカだった！ まあ——ムニーはそれほどじゃなかったな」シリウスがルーピンを見ながら言いすぎを訂正した。

しかしルーピンは首を振った。

「私が一度でも、スネイプにかまうのはよせて言ったか？ 私に、君たちのやり方はよくないと忠告する勇気があったか？」

「まあ、いわば」シリウスが言った。

「君は、時々僕たちのやっていることを恥ずかしいと思わせてくれた……それが大事だった……」

「それに」ここに来てしまった以上、気にな

“I’m fifteen!” said Harry heatedly.

“Look, Harry,” said Sirius placatingly, “James and Snape hated each other from the moment they set eyes on each other, it was just one of those things, you can understand that, can’t you? I think James was everything Snape wanted to be — he was popular, he was good at Quidditch, good at pretty much everything. And Snape was just this little oddball who was up to his eyes in the Dark Arts and James — whatever else he may have appeared to you, Harry — always hated the Dark Arts.”

“Yeah,” said Harry, “but he just attacked Snape for no good reason, just because — well, just because you said you were bored,” he finished with a slightly apologetic note in his voice.

“I’m not proud of it,” said Sirius quickly.

Lupin looked sideways at Sirius and then said, “Look, Harry, what you’ve got to understand is that your father and Sirius were the best in the school at whatever they did — everyone thought they were the height of cool — if they sometimes got a bit carried away —”

“If we were sometimes arrogant little berks, you mean,” said Sirius.

Lupin smiled.

“He kept messing up his hair,” said Harry in a pained voice.

Sirius and Lupin laughed.

“I’d forgotten he used to do that,” said Sirius affectionately.

“Was he playing with the Snitch?” said Lupin eagerly.

“Yeah,” said Harry, watching uncomprehendingly as Sirius and Lupin beamed reminiscently. “Well ... I thought he was a bit of an idiot.”

“Of course he was a bit of an idiot!” said

っていることは全部言ってしまうと、ハリーは食い下がった。

「父さんは、湖のそばにいた女の子たちに自分のほうを見てほしいみたいに、しょっちゅうちらちら見ていた！」

「ああ、まあ、リリーがそばにいと、ジェームズはいつもバカをやったな」シリウスが肩をすくめた。

「リリーのそばに行くと、ジェームズはどうしても見せびらかさずにはいらなかった」

「母さんはどうして父さんと結婚したの？」ハリーは情けなさそうに言った。

「父さんのことを大嫌いだったくせに！」

「いいや、それは違う」シリウスが言った。

「七年生のときにジェームズとデートしはじめたよ」ルーピンが言った。

「ジェームズの高慢ちきが少し治ってからだ」シリウスが言った。

「そして、おもしろ半分に呪いをかけたりしなくなってからだよ」ルーピンが言った。

「スネイプにも？」ハリーが聞いた。

「そりゃあ」ルーピンが考えながら言った。

「スネイプは特別だった。つまり、スネイプは隙あらばジェームズに呪いをかけようとしたんだ。ジェームズだって、おとなしくやられっ放しというわけにはいかないだろう？」

「でも、母さんはそれでよかったの？」

「正直言って、リリーはそのことはあまり知らなかった」シリウスが言った。

「そりゃあ、ジェームズがデートにスネイプを連れて行って、リリーの目の前で呪いをかけたりはしないだろう？」

まだ納得できないような顔のハリーに向かって、シリウスは顔をしかめた。

「いいか」シリウスが言った。

「君の父さんは、わたしの無二の親友だったし、いいやつだった。十五歳のときには、たいていみんなバカをやるものだ。ジェームズはそこを抜け出した」

「うん、わかったよ」ハリーが気が重そうに言った。

「ただ、僕、スネイプをかわいそうに思うなんて、考えてもみなかったから」

「そう言えば」ルーピンが微かに眉間に皺を寄せた。

Sirius bracingly. “We were all idiots! Well — not Moony so much,” he said fairly, looking at Lupin, but Lupin shook his head.

“Did I ever tell you to lay off Snape?” he said. “Did I ever have the guts to tell you I thought you were out of order?”

“Yeah, well,” said Sirius, “you made us feel ashamed of ourselves sometimes. ... That was something. ...”

“And,” said Harry doggedly, determined to say everything that was on his mind now he was here, “he kept looking over at the girls by the lake, hoping they were watching him!”

“Oh, well, he always made a fool of himself whenever Lily was around,” said Sirius, shrugging. “He couldn’t stop himself showing off whenever he got near her.”

“How come she married him?” Harry asked miserably. “She hated him!”

“Nah, she didn’t,” said Sirius.

“She started going out with him in seventh year,” said Lupin.

“Once James had deflated his head a bit,” said Sirius.

“And stopped hexing people just for the fun of it,” said Lupin.

“Even Snape?” said Harry.

“Well,” said Lupin slowly, “Snape was a special case. I mean, he never lost an opportunity to curse James, so you couldn’t really expect James to take that lying down, could you?”

“And my mum was okay with that?”

“She didn’t know too much about it, to tell you the truth,” said Sirius. “I mean, James didn’t take Snape on dates with her and jinx him in front of her, did he?”

Sirius frowned at Harry, who was still

「全都見られたと知ったときのスネイプの反応はどうだったのかね？」

「もう二度と『閉心術』を教えないって言った」

ハリーが無関心に言った。

「まるでそれで僕ががっかりするとでもー」

「あいつが、なんだと？」シリウスの叫びで、ハリーは飛び上がり、口一杯に灰を吸い込んでしまった。

「ハリー、本当か？」ルーピンがすぐさま聞いた。

「あいつが君の訓練をやめたのか？」

「うん」過剰と思える反応に驚きながら、ハリーが言った。

「だけど、問題ないよ。どうでもいいもの。僕、ちょっとほっとしてるんだ。ほんとのこと言うと」

「向こうへ行って、スネイプと話す！」シリウスが力んで、本当に立ち上がろうとした。しかしルーピンが無理やりまた座らせた。

「誰かがスネイプに言うとしたら、私しかない！」ルーピンがきっぱりと言った。

「しかし、ハリー、まず君がスネイプのところに行って、どんなことがあっても訓練をやめてはいけないと言うんだーダンブルドアがこれを聞いたらー」

「そんなことスネイプに言えないよ。殺される！」ハリーが憤慨した。

「二人とも、『憂いの篩』から出てきたときのスネイプの顔を見てないんだ」

「ハリー、君が『閉心術』を習うことは、何よりも大切なことなんだ！」ルーピンが厳しく言った。

「わかるか？ 何よりもだ！」

「わかった、わかったよ」ハリーはすっかり落ち着かない気持ちになり、苛立った。

「それじゃ……それじゃ、スネイプに何か言ってみるよ……だけど、そんなことしてもー」

ハリーが黙り込んだ。遠くに足音を聞いたのだ。

「クリーチャーが下りてくる音？」

「いや」シリウスがちらりと振り返りながら言った。

looking unconvinced.

“Look,” he said, “your father was the best friend I ever had, and he was a good person. A lot of people are idiots at the age of fifteen. He grew out of it.”

“Yeah, okay,” said Harry heavily. “I just never thought I’d feel sorry for Snape.”

“Now you mention it,” said Lupin, a faint crease between his eyebrows, “how did Snape react when he found you’d seen all this?”

“He told me he’d never teach me Occlumency again,” said Harry indifferently, “like that’s a big disappoint —”

“He WHAT?” shouted Sirius, causing Harry to jump and inhale a mouthful of ashes.

“Are you serious, Harry?” said Lupin quickly. “He’s stopped giving you lessons?”

“Yeah,” said Harry, surprised at what he considered a great overreaction. “But it’s okay, I don’t care, it’s a bit of a relief to tell you the —”

“I’m coming up there to have a word with Snape!” said Sirius forcefully and he actually made to stand up, but Lupin wrenched him back down again.

“If anyone’s going to tell Snape it will be me!” he said firmly. “But Harry, first of all, you’re to go back to Snape and tell him that on no account is he to stop giving you lessons — when Dumbledore hears —”

“I can’t tell him that, he’d kill me!” said Harry, outraged. “You didn’t see him when we got out of the Pensieve —”

“Harry, there is nothing so important as you learning Occlumency!” said Lupin sternly. “Do you understand me? Nothing!”

“Okay, okay,” said Harry, thoroughly discomposed, not to mention annoyed. “I’ll ... I’ll try and say something to him. ... But it

「君の側の誰かだな」
ハリーの心臓がドキドキを数拍吹っ飛ばした。
「帰らなくちゃ！」ハリーは慌ててそう言う
と、グリモールド・プレイスの暖炉から首を
引っ込めた。一瞬、首が肩の上で回転してい
るようだったが、やがてハリーは、アンブリ
ッジの暖炉の前に跪いていた。
首はしっかり元に戻り、エメラルド色の炎が
ちらついて消えていのを見ていた。
「急げ、急げ！」ドアの外で誰かがゼイゼイ
と低い声で言うのが聞こえた。
「ああ、先生は鍵も掛けずにー」
ハリーが「透明マント」に飛びつき、頭から
被ったとたんに、フィルチが部屋に飛び込ん
できた。
有頂天になって、うわ言のように独りで何か
を言いながら、フィルチは部屋を横切り、ア
ンブリッジの机の引き出しを開け、中の書類
を風潰しに探しはじめた。
「鞭打ち許可証……鞭打ち許可証……とうと
うその日が来た……もう何年も前から、あい
つらはそうされるべきだった……」
フィルチは羊皮紙を一枚引っ取り出し、それ
にキスし、胸元にしっかり握り締めて、不格
好な走り方であたふたとドアから出ていっ
た。
ハリーは弾けるように立ち上がった。
カバンを持ったかどうか、「透明マント」で
完全に覆われているかどうかを確かめ、ドア
をぐいと開け、フィルチのあとから部屋を飛
び出した。
フィルチは足を引きずりながら、これまで見
たことがないほど速く走っていた。
アンブリッジの部屋から一つ下がった踊り場
まで来て、ハリーはもう姿を現しても安全だ
と思った。
「マント」を脱ぎ、カバンに押し込み、先を
急いだ。
玄関ホールから叫び声や大勢が動く気配が聞
こえてきた。
大理石の階段を駆け下りて見ると、そこには
ほとんど学校中が集まっているようだった。
ちょうど、トレローニー先生が解雇された夜
と同じだった。

won't be ...”

He fell silent. He could hear distant footsteps.

“Is that Kreacher coming downstairs?”

“No,” said Sirius, glancing behind him. “It must be somebody your end ...”

Harry’s heart skipped several beats.

“I’d better go!” he said hastily and he pulled his head backward out of Grimmauld Place’s fire. For a moment his head seemed to be revolving on his shoulders, and then he found himself kneeling in front of Umbridge’s fire with his head firmly back on, watching the emerald flames flicker and die.

“Quickly, quickly!” he heard a wheezy voice mutter right outside the office door. “Ah, she’s left it open. ...”

Harry dived for the Invisibility Cloak and had just managed to pull it back over himself when Filch burst into the office. He looked absolutely delighted about something and was talking to himself feverishly as he crossed the room, pulled open a drawer in Umbridge’s desk, and began rifling through the papers inside it.

“Approval for Whipping ... Approval for Whipping ... I can do it at last. ... They’ve had it coming to them for years. ...”

He pulled out a piece of parchment, kissed it, then shuffled rapidly back out of the door, clutching it to his chest.

Harry leapt to his feet and, making sure that he had his bag and the Invisibility Cloak was completely covering him, he wrenched open the door and hurried out of the office after Filch, who was hobbling along faster than Harry had ever seen him go.

One landing down from Umbridge’s office and Harry thought it was safe to become

壁の周りに生徒が大きな輪になって立ち（何人かはどう見ても「臭液」と思われる物質をかぶっているのにハリーは気づいた）、先生とゴーストも混じっていた。

見物人の中でも目立つのが、ことさらに満足げな顔をしている「尋問官親衛隊」だった。ビーズが頭上にヒョコヒョコ浮かびながらフレッドとジョージをじっと見下ろしていた。

二人はホールの中央に立ち、紛れもなく、たったいま追い詰められたという顔をしていた。

「さあ！」アンブリッジが勝ち誇ったように言った。

気が付くと、ハリーのほんの数段下の階段にアンブリッジが立ち、改めて自分の獲物を見下ろしているところだった。

「それじゃーあなたたちは、学校の廊下を沼地に変えたらおもしろいと思っているわけね？」

「相当おもしろいね、ああ」フレッドがまったく恐れる様子もなく、アンブリッジを見上げて言った。

フィルチが人混みを肘で押し分けて、幸せのあまり泣かんばかりの様子でアンブリッジに近づいてきた。

「校長先生、書類を持ってきました」フィルチは、いましがたハリーの目の前でアンブリッジの机から引っ張り出した羊皮紙をひらひらさせながら、しわがれ声で言った。

「書類を持ってきました。それに、鞭も準備してあります……ああ、いまずぐ執行させてください……」

「いいでしょう、アーガス」アンブリッジが言った。

「そこの二人」フレッドとジョージを見下ろして睨みながら、アンブリッジが言葉を続けた。

「わたくしの学校で悪事を働けばどういう目に遭うかを、これから思い知らせてあげましょう」

「ところがどっこい」フレッドが言った。

「思い知らないね」

フレッドが双子の片われを振り向いた。

「ジョージ、どうやら俺たちは、学生稼業を

visible again; he pulled off the cloak, shoved it in his bag and hurried onward. There was a great deal of shouting and movement coming from the entrance hall. He ran down the marble staircase and found what looked like most of the school assembled there.

It was just like the night when Trelawney had been sacked. Students were standing all around the walls in a great ring (some of them, Harry noticed, covered in a substance that looked very like Stinksap); teachers and ghosts were also in the crowd. Prominent among the onlookers were members of the Inquisitorial Squad, who were all looking exceptionally pleased with themselves, and Peeves, who was bobbing overhead, gazed down upon Fred and George, who stood in the middle of the floor with the unmistakable look of two people who had just been cornered.

“So!” said Umbridge triumphantly, whom Harry realized was standing just a few stairs in front of him, once more looking down upon her prey. “So ... you think it amusing to turn a school corridor into a swamp, do you?”

“Pretty amusing, yeah,” said Fred, looking back up at her without the slightest sign of fear.

Filch elbowed his way closer to Umbridge, almost crying with happiness.

“I’ve got the form, Headmistress,” he said hoarsely, waving the piece of parchment Harry had just seen him take from her desk. “I’ve got the form and I’ve got the whips waiting. ... Oh, let me do it now. ...”

“Very good, Argus,” she said. “You two,” she went on, gazing down at Fred and George, “are about to learn what happens to wrongdoers in my school.”

“You know what?” said Fred. “I don’t think we are.”

卒業しちまったな？」
「ああ、俺もずっとそんな気がしてたよ」ジョージが気軽に言った。
「俺たちの才能を世の中で試すときが来たな？」フレッドが聞いた。
「まったくだ」ジョージが言った。
そして、アンブリッジが何も言えないうちに、二人は杖を上げて同時に唱えた。
「アクシオ！ 箒よ、来い！」
どこか遠くで、ガチャンと大きな音がした。左のほうを見たハリーは、間一髪で身をかわした。
フレッドとジョージの箒が、持ち主めがけて廊下を矢のように飛んできたのだ。
一本は、アンブリッジが箒を壁に縛りつけるのに使った、重い鎖と鉄の杭を引きずったままだ。
箒は廊下から左に折れ、階段を猛スピードで下り、双子の前でぴたりと止まった。
鎖が石畳の床でガチャガチャと大きな音を立てた。
「またお会いすることもないでしょう」フレッドがパッと足を上げて箒に跨りながら、アンブリッジ先生に言った。
「ああ、連絡もくださいますな」ジョージも自分の箒に跨った。
フレッドは集まった生徒たちを見回した。群れは声もなく見つめていた。
「上の階で実演した『携帯沼地』をお買い求めになりたい方は、ダイアゴン横丁九十三番地までお越しください。『ウィーズリー ウィザード ウィーズ店』でございます」フレッドが大声で言った。
「我々の新店舗です！」
「我々の商品を、この老いぼれババアを追い出すために使うと誓っていただいた hogwarts 生には、特別割引をいたします」ジョージがアンブリッジ先生を指差した。
「二人を止めなさい！」
アンブリッジが金切り声をあげたときには、もう遅かった。
尋問官親衛隊が包囲網を縮めたときには、フレッドとジョージは床を蹴り、五メートルの高さに飛び上がっていた。
ぶら下がった鉄製の杭が危険をはらんでプラ

He turned to his twin.

“George,” said Fred, “I think we’ve outgrown full-time education.”

“Yeah, I’ve been feeling that way myself,” said George lightly.

“Time to test our talents in the real world, d’you reckon?” asked Fred.

“Definitely,” said George.

And before Umbridge could say a word, they raised their wands and said together, “*Accio Brooms!*”

Harry heard a loud crash somewhere in the distance. Looking to his left he ducked just in time — Fred and George’s broomsticks, one still trailing the heavy chain and iron peg with which Umbridge had fastened them to the wall, were hurtling along the corridor toward their owners. They turned left, streaked down the stairs, and stopped sharply in front of the twins, the chain clattering loudly on the flagged stone floor.

“We won’t be seeing you,” Fred told Professor Umbridge, swinging his leg over his broomstick.

“Yeah, don’t bother to keep in touch,” said George, mounting his own.

Fred looked around at the assembled students, and at the silent, watchful crowd.

“If anyone fancies buying a Portable Swamp, as demonstrated upstairs, come to number ninety-three, Diagon Alley — Weasleys’ Wizarding Wheezes,” he said in a loud voice. “Our new premises!”

“Special discounts to Hogwarts students who swear they’re going to use our products to get rid of this old bat,” added George, pointing at Professor Umbridge.

“STOP THEM!” shrieked Umbridge, but it was too late. As the Inquisitorial Squad closed

ブラ揺れていた。

フレッドは、ホールの反対側で、群集の頭上に自分と同じ高さでピョコピョコ浮いているポルターガイストを見つけた。

「ビーブズ、俺たちに代わってあの女をてこずらせてやれよ」

ビーブズが生徒の命令を聞く場面など、ハリーは見たことがなかった。

そのビーブズが、鈴飾りのついた帽子をさっと脱ぎ、敬礼の姿勢を取った。

眼下の生徒たちのやんやの喝采を受けながら、フレッドとジョージはくると向きを変え、開け放たれた正面の扉を素早く通り抜け、輝かしい夕焼けの空へと吸い込まれていった。

in, Fred and George kicked off from the floor, shooting fifteen feet into the air, the iron peg swinging dangerously below. Fred looked across the hall at the poltergeist bobbing on his level above the crowd.

“Give her hell from us, Peeves.”

And Peeves, whom Harry had never seen take an order from a student before, swept his belled hat from his head and sprang to a salute as Fred and George wheeled about to tumultuous applause from the students below and sped out of the open front doors into the glorious sunset.